

新体詩と改良長歌

詩歌史の背後にあるもの

勝原晴希

一 新体詩と改良長歌

近代日本の詩は『新体詩抄』(明治十五年)に始まる。『新体詩抄』においてもっとも重要であるのは、「凡例」の次のような記述に見られる「詩」の觀念であつた。^(注)

均シク是レ志ヲ云フナリ、而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ総稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ、詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ『ポエトリー』ト云フ語即チ歌ト詩トヲ総稱スルノ名ニ当ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ、

こゝして「泰西ノ『ポエトリー』ト云フ語即チ歌ト詩トヲ総稱スルノ名」としての「詩」が誕生した。「歌ト詩ト

ヲ総称スル」という概念が提示されて、初めて「詩」の歴史が始動したのである。このような「新体ノ詩」に対して、もつとも痛烈な批判をなしたのは新桂園派の歌人・池袋清風の「新体詩批評」（明治二十二年）であるが、『新体詩抄』中もつとも良質とみなされる矢田部良吉訳「グレー氏墳上感懐の詩」の冒頭部分、「野山もかすみいりあひの鐘はなりつゝ野の牛はノ徐に歩み帰り行く」を、清風は次のように訳し変えている。

あし曳の、遠山寺の、入相の、鐘のひゞきは、かへりこぬ、けふの別れを、告にけり、野末はるかに、うちむれて、野かひの牛の、帰り行、声もあはれに、聞つゝ、

この清風の改訳には、改行が施されていない。「句」「連」の導入という形式的な変更は、新体詩という新しいジャンルに、欠かすことができないものであった。^(注2)しかしながら「句」「連」の導入だけでは、「新体詩」とはならない。たとえば清風の改訳に、新体詩の形式を施すと、こうなる。

あし曳の、遠山寺の、

入相の、鐘のひゞきは

かへりこぬ、けふの別れを、告にけり、

野末はるかに、うちむれて、

野かひの牛の、帰り行
 声もあはれに、聞つゝ、

こうしたものが改良長歌の原型である。「改良長歌」と「新体詩」とは、どこが違うのか。山宮充氏は『新体詩抄』の意義を、次のようにまとめている。(「解説」『日本現代詩大系第一巻』河出書房新社、一九七四・九)。

- 一、自由長大なる詩形を採用して、国詩の規模を大にし、新時代の複雑な思想感情の表現を可能ならしめようとしたこと。
- 二、用語の範囲を拡大し、殊に雅語、古語以外平俗常用の言語を自由に使用し、衆庶に理解し易からしめようとしたこと。
- 三、題材の範囲を拡大し、花鳥風月の在来の詩的題材以外、ひろく人生の事象中より自由に取材しようとしたこと。
- 四、かくして自由詩への道を拓いたこと。

このうち「四」については、若干の補足が必要である。『新体詩抄』の時点で、編者たちは七五もしくは五七の定型を捨てることはできなかった。彼らは正当にも、詩には「音調の宜しき」(外山正一『新体詩抄』「序」)ことが必須だと考えていたからである。定型が廃棄されるのは、『新体詩歌集』(明治二十八年)のことであって、「感情的口演」(外山

正一『新体詩歌集』「序」によって「音調の宜しき」こと、すなわち詩の音楽性が補償されることになる。

それはともあれ、山宮充氏のあげている四点のうち、第一、第三の点、すなわち、「用語の範囲を拡大」するか否か、「題材の範囲を拡大」するか否かが、新体詩と改良長歌を分かつメルクマルとなる。要するに、伝統を切断するか否か、ということである。

『新体詩抄』は、編者自ら「新体など」名を付けるには付けたが、「やはり古来の長歌流」（外山正一『新体詩抄』「序」と記さざるを得なかつたように、様式としては「長歌」の復興とも解されるものであった。ここに「和歌否定より新体詩への展開にいたる論」と「和歌の伝統を保持しつつ、これを改良して行かうとする論」（小泉冬三『近代短歌史』明治二十一年）とが対立しつつ、併存することになる。萩野由之「小言」（明治二十年）、佐佐木健（信綱）「和歌の治篇」（昭和三十年）とが対立しつつ、併存することになる。後者の和歌改良論にあっては、伝統の断絶は拒絶されているのであり、そこに構想される作品は、同じ詩形式と見えて、新体詩とは性質の異なるものなのである。

二 朦朧体論争の背景

『新体詩抄』の系統としての「新体詩」と、和歌改良の系統としての改良長歌との対立は、いわゆる「朦朧体論争」として、『帝国文学』に露わになる。『帝国文学』は誌名にも明らかなように、日清戦争の勝利によって日本が国民国家の形成から帝国主義へ、膨張主義へと転じていく、その潮流に棹さすものとして、「国民文学」（第一巻第一号「序詞」）の育成を目標に掲げていた。その中心人物は井上哲次郎であり、第一号から第三号までに掲載された「日本文学の過

去及び将来（「国文学」ではなく「日本文学」としている点に、すでに彼の立場が現われている）に、「国民文学」とは如何なるものであるかが縷縷、説かれていた。「我邦は固より国民精神を有すと雖も、西洋思想の澎湃として激浪の如く侵入し（中略）今や各種の思想は各処に相戦ひ、一大修羅場を開き、（中略）我邦固有の思想も或は圧倒せられんとするの恐なきにあらず」という記述の背後に、国際間の（帝国主義的）生存競争に勝ち抜かねばならないという、社会進化論に支えられた認識があることは明らかだろう。そのために彼は、古今東西を問わず、あらゆる文学から優れたものを取り入れることを主張する。

国民文学は一切外国思想を拒絶して単に自国に固有なる思想を叙述するに止まるべきものにあらず、若し然くせんか、文学は狭隘褊小にして擬古の地位を脱すること能はず、恰も固陋なる国学者の手に成るが如き性質を成さん、

国民文学の性質は総合的構造なるが故に擬古にあらず、守旧にあらず、自主的進歩なり、内面より活動して促す所の発達なり、

塩井雨江 武島羽衣 大町桂月らが、やがて「擬古派」と呼ばれることになる。その「擬古」という言葉には、このように「狭隘褊小」「固陋」「守旧」という意味が籠められていたのである。

さらに井上哲次郎は、『帝国文学』第三巻第一、二号掲載の「新体詩論」で、問題の焦点を「新体詩」に絞っている。

そこで井上は、「旧来の格法を打破すること」は「局外者たる吾人によりて」初めて可能だったのであり、「如何なる冷嘲熱罵も吾人に於て何かあらん」と豪語しつつ、次のように述べている。

新体詩其物は一般に認識さるゝに至れりと雖も、新体詩家の中幾多の分派を生じ、旧来の格法を捨つること能はざるの徒にして、新体詩の名を仮りて吾人が旗幟の下に入り来たり、其本来の趣向を顛倒して、却りて吾人に反抗するもの少なしとせず、(中略)競争は已に内部と外部にあらずして、内部の分派にあり、

新体詩はすでに認知された、敵は内部にある。新体詩の旗幟を借り本来の趣向を顛倒して反抗するもの、それが、改良長歌としての詩である。井上は新体詩特有の性質を八項目にわたって指摘した後、歌人の非難を気にするには及ばない、「新体詩家は初めより彼等の同情を求むべきにあらず、否、彼等と反対の位置に立つべき」である、にもかかわらず、歌人の賛同を得ようとして「徒に古代の死語を羅列」する者は、「似而非の新体詩家にして真正の新体詩家にあらず」、「擬古的の詩篇は寧ろ旧体詩と称して新体詩と區別するを要するなり」と言い放っている。

もう一人の『新体詩抄』の編者である外山正一は、『文科大学長』として『帝国文学』の後見人とも言つべき位置にあるが、彼もまた第一巻第三、四号の「新体詩及び朗読法」において、改良長歌としての新体詩を批判している。

新体詩とは。近年世間に行はるゝ。彼の。雅言を以て七五若しくは五七的に作られる。一種の柔弱なる新体詩を。特に指す固有名詞の如くに思ひ居る人も少なからぬ様であります。然れども。始めて新体詩を作りたる人々。始

めて新体詩と云ふ名称を用ゐたる人々に在ては。此の新体詩と云ふ名称は。決して。斯く狭隘なる意味にて之を用ゐたる次第ではありませぬ。

「新体詩及び朗誦法」は、前年の九月に中村秋香・上田万年・阪正臣とともに刊行した『新体詩歌集』の「序」に言つ「感情的口演」を説明するものとして書かれて（正確には講演されて）いる。外山は七五七七の口調は「演述」に不適當なものであり、新体詩が「演述」すべきものであるならば、七五七七の口調は不適當であると言つ。「西洋に於ては。詩人が。我が作を聴衆の前に於て朗誦し。若しくは闇誦する」「英語にて。「レシテイション」とか「デクラメイション」とか云ふ様な事」を、外山は取り入れようと云つわけである（「新体詩及び朗誦法」そのものが、句点によつて、おそらく講演された時と同じ区切りを施されている。彼の言つ「感情的口演」は、七五七七という「究屈なる羈絆を脱したるもの」、すなわち自由詩に通じるものであることは言つまでもない。

さらに外山は、詩の用語に触れて、「用語也。雅言也。比喩語也。枕詞也。重意語等を多く用ゐる事を好む人が。今時は余程多い様であります。斯る種類の詞を多く用ゐて。意味を朦朧たらしむる事を。頻りに力むる人が多い様であります。」「が併し、人を感動せしむるの点に至ては。斯る虚飾を用ゐず。分り易き詞を以て。意味の明瞭なる様に綴る方が。却て。優つた法ではありませぬか」として、万葉集の性質を「ナチュラル」^(注3)、新古今集の性質を「アーチフィシャル」だとしている。

俗語でも漢語でも。人に能く分る様な詞の中で。強い詞や優い詞と。其れ其れ其場合々に隨て。適當なるも

のを選んで、用ゐべきであると思ひます。さうすれば、縦や、巧に作れたとか、華麗に出来たとか云つて、人に褒められる事はなくとも、人を感動せしむる事は、却て、多くできるであらうと思ひます。

こつした井上・外山両名の意見を背景に、二人の弟子である高山樗牛が、「朦朧派の詩人に与ふ」(『太陽』第三卷第十九号、明治三十年七月)など、繰り返し「朦朧派」を批判するのだが、その論旨は右に引いた井上・外山の論に含まれるものなので、ここでは繰り返さない。

「擬古派」「朦朧派」と呼ばれたのは、主として塩井雨江、武島羽衣、大町桂月の三人だが、彼等はいずれも落合直文の秋之舎門下であり、また第一高等学校で直文に学んだ人たちであった。批判の声に対して、『帝国文学』第一巻第三号「雑報」欄に、無署名「朦朧体」、署名「HT」による「新体詩と雅俗語」が反論されている。

浅膚露骨なる新体詩を喜ぶの徒、焉んぞ嫺々たる言外の余韻を解せんや。彼等が目して朦朧体といふもの、知らず、詩果たして朦朧なる。抑も読む者の眼果して朦朧なる。詩は謡ひ、科字は語る。語る者は明晰周到、錙銖を分ち、極微に徹するを要す。謡ひ者は含蓄温藉、抑揚節に中り、抗墜心に適せざるべからず。(「朦朧体」)

世の批評家やゝもすれば、現時の新体詩を目して、用語ひたすらに迂遠にして、行文はた擬古に、総じて耳遠くして、今日大多数の人に解せらるゝことは極めて少なし。詩人は宜しく、今生活しつゝある言語、則ち普通俗用の言語を以て、最平易簡明に書き下らざるべからずと。嗚呼、彼等は、詩歌もまた散文と同じく、其文中任意

に俗語普通語を縦横に使用して些の不可なしといふか、(中略) 詩歌が(狭義に言ふところの) 詩歌ならざる文章と差別せらるる条件は、其数いと多きが中に、外形に關したる方にては Archaisms と Noncolloquialisms との行はるゝは、其最著しき二個の特点にあらずや。これ蓋し詩歌は平生の談話とは異にして、一層悠遠高尚なる感情想像の世界に遊ぶものなるを以て、吾人が、平常の通用より一步高めたる言辭を用ひて、以てそが使用に応ぜんとするは、これ数の免れざるところなり、而して、その措辭の目なれざること、其言語の時代よりおこりきたりたる聯想とは、詩歌が、高遠にして且純潔なる本性に最よく適合し、(以下略)

大町桂月もまた、「詩歌における古語及び俗語」(『帝國文學』第三卷第四、五、六号)において、「近時、詩字修辭学の素養なきの徒が漫に言語の末を捉へて、臆腫と呼び、擬古と呼び、先人の素人考主となりて、強ひて自から城壁を設くるもの少なからず」として、井上哲次郎の「新体詩論」そして井上の作品「比沼山の歌」を批判しつつ、西洋の詩論を盾に、「新体詩と雅俗語」(HT)と同様の論を展開している。「同様」と言っただけでなく、右に引いた「新体詩と雅俗語」とほぼ同一の一節が、「詩歌における古語及び俗語」にも記されている。「HT」とは武島羽衣であるところから、桂月が羽衣の一文を下敷きにしたのか、あるいは二人で論を練ったのか、いささか不審である。ともあれ、両者は詩が科学や散文とは異なるものであるといふこと、詩とは人をして「悠遠高尚なる感情想像の世界」に遊ばしめるものであるといふこと、それゆえに日常の言語とは異なる古語が必須であることにおいて、一致している。

こうして、『新体詩抄』の新体詩と、長歌の改良としての新体詩(井上にならって旧体詩と呼ぶべきか)との対立が、浮かび上がった。『帝國文學』第三卷第四号、署名「はな」による「新体詩界の二大弊」は、「彼の擬古体と目せら

る、保守派の新体詩」と「擬古体に対峙して現れたる進歩派の新体詩」との欠点を指摘し、両派が互いに短所を補い合うことを勧め、第三卷第十一号の無署名「朦朧の文体」は、「余輩は新体詩の朦朧露骨両様の何れを拏げんとはあらざれども」「むしろ文の朦朧ならん事を望む」としている。『太陽』の第四卷一八号（明治三年九月）「新体詩壇の消息」に「先づ著しき現象は、擬古派の作の甚だ稀になることはなり」とあるのは、樽牛が『帝国文学』から『太陽』に執筆の場所を変えていたのであるから、信用しがたい。実際にはなお「新体詩の朦朧露骨両様」の作品が書かれていたのであるが、後世から見ればどちらも藤村の影に隠れてしまったというのが実際のところであろう。

三 抗争する二つの「国」

大町桂月「詩歌における古語及び俗語」に、次のような一節があるのは、興味深い。

彼の科学上の述語の如きは俗語の尤も甚しきものにして、到底之を詩歌に用つべきものにあらざる也。明晰露骨乾燥無味散文的論理的なるものは生存競争場裡の優者にして、然らざる者は劣者也。劣者は「己」優者は存す。而して実用上の劣者にして始めて詩歌上の優者たるを得べし。

興味深いというのは、「実用上の劣者にして始めて詩歌上の優者たるを得べし」という予言を、まさに藤村が現実のものとしたということだけではない。それよりも今、注目したいのは、「科学上の述語」「生存競争場裡」という言葉

である。『新体詩抄』の編者たちがスペンサーの社会進化論の影響下にあつたことは、よく知られていよう。そして『新体詩抄』の詩編の幾つかが詩集に先立つて掲載された『東洋学芸雑誌』は、科学啓蒙雑誌だったのである。第一号の内容は、「人為淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス」（加藤弘之、「題有幾化学沿革史後」（杉浦重剛）、「ヒューム氏自由政治論並ニ評」（編者識）、「学芸論」（井上哲次郎）、「雑報」となっている。加藤の「人為淘汰」の論は二号にわたり、さらに四号からは編者による「自然淘汰法及ヒ之ヲ人類ニ及ボシテハ如何ヲ論ス」が掲載されている。『東洋学芸雑誌』はまさしく「生存競争場裡」を意識した「科学上の述語」に満ちた雑誌だったのである。第一号の「緒言」は、次のようなものであつた（便宜的に濁点・句点を補つた）。

我邦人ノ理学ノ思想ニモシキハ識者ノ常ニ憂フルトコロナリ。故ニ之ヲ救ハンガ為ニ此雑誌ニ理学ニ関係アル文章ヲ掲載シテ其性質及ビ効用ヲ世ニ明ニセン事ヲカメタリ。固ヨリ詰屈解シ難キコトノミヲ討論スルニ非ズト雖ドモ世尚ホ或ハ此雑誌ノ読ミ難キヲ困ジムモノナキニ非ズ。因テ更ニ其区域ヲ広メ文芸上ニ涉レル平易ナル文章ヲモ其間ニ雜ヘ甘苦相ハンナカラシメ以テ世人ノ望ニ負ク無キヲ期スト云爾

「本誌ノ如キハ専ラ學術上ニ関スル論說記事ヲ記載スルニ止マルモノナレバ」「恐ラクハ喜ンデコレヲ読ムモノナカルベシ」（上田秀成「祝詞」第四号）という不安は杞憂に終わり、「読者八日ニ増シ月ニ加ハル」（同）という迎え入れられようで、第四号からは紙数も増し、やがて純粹な科学啓蒙雑誌として、文芸上の記事も減つて行く。それはそれとして、矢田部良吉のハムレット訳（六号）や外山正一の「抜刀隊」（八号）などは、理学の「性質及ビ効用」を説く文

章の受け入れがたさをやわらげるために、その間に挿入される「文芸上ニ渉レル平易ナル文章」として、掲載されたのであった。武島羽衣や大町桂月が、詩の言葉に対立するのは科学の言葉であるとしているのは、決して偶然ではないのである。『新体詩抄』の言葉は、「理学ニ関係アル文章」「學術上ニ関スル論說記事」に対立することなく同居可能な言葉なのであった。

『東洋学芸雑誌』の第七、八号に、「東京大学理学部教授 矢田部良吉」の「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」が掲載されている（ちなみに第七号では矢田部の論につづいて、「独逸国博士ダビッド、ブラウンス氏」の「日本陸地肉食動物ノ散布」の訳が、第八号では「理学士 磯野徳三郎」の「分子ノ重量」が掲載されている）。矢田部は日本の語は「思想ノ記号」であり、西洋諸国の語のような「音声ヲ表示スルモノ」ではないため、習得のために貴重な時間を空しく消費するとして、ローマ字の使用を提唱し、次のような例を示している。

Jichin osho Shugyokushu no Imayo

Haru no yayoi no akebono ni.

Yomo no yamabe wo miwata seba,

Hanazakari kamo shirakumo no

Hakara nu mine koso nakarikere.

Hanatachibana no nio nari,

noki no ayame no kaoru nari;

Yugure-zawa no samidare ni

Yama-hototogisu-nanori shite.

矢田部の論は、明治十八年一月、外山正一を中心として羅馬字会が設立される、その準備段階で記されたものであろう。『新体詩抄』の言葉は、「科学」の言葉、ローマ字のような、透明な記号を旨とするものであった。

一方、塩井雨江、武島羽衣、大町桂月の師である落合直文の「孝女白菊の歌」が掲載された『東洋学会雑誌』は、第一編第一号の島田重礼「東洋学会発会ノ演説」に、「今や西洋學術次第二東漸シ日二開ケ月二盛二一網打尽固有ノ學術地ヲ払フニ至ントス苟モ志アル者和學漢字等ノ藩籬ヲ一掃シ同心協力微字ヲ振ヒ類運ヲ回シ 先皇ノ盛意ヲ万世ニ伝ヘザルベケンヤ」とあるように、このような欧化政策の路線に抵抗するものであった。とはいつものの、『東洋学会雑誌』と『東洋学芸雑誌』はともに東京帝国大学系の雑誌であり、その意味では兄弟雑誌でもあった。『東洋学会雑誌』には文学部長井上哲次郎による「万国東洋学会近況」も随時、掲載されている。そもそも『東洋学会雑誌』の母体である古典講習科の設立には、大学総理加藤弘之の意志が介在していた。

いにし十五年といふ年の九月よりして東京大学のうちに古典講習科を置かせ給ひむねと我国の古の書ども学ばせ給ふこととなりぬるはやうく花さき実のらん時に逢へりといふべし。さるは此近き年ごろふるき書にくはし

き人たちの次々身まかりしからに終にはをしへ草の根を絶えぬべしと総理の君の深きおもひはかりに出たるみしわざになん有けるかゝれば其をしへ業も世に国学者といふものゝ並々とひとしからず

(小中村清矩・無題 『東洋学芸雑誌』 第二号)

第一号掲載の論説「字問 明治十九年十月東洋学会ニ於テ」で、「字問八唯一定不変ノ真理ヲ究明セン事ヲ務ルモノナレバ決シテ時代ト場所トニ応ジテ異ナルモノニハ非ザルナリ」と述べているように、加藤弘之の意図は国学の保存ではなく、国学の改良、近代化にあった。加藤の意図を受けとめて、小中村義象も「古典学革弊私論(第四号)」を記し、「何ゾ決然奮起古典学ヲシテ彼ノ老耄前途頼ミナキノ徒ニノミ委任シ置クノ旧例ヲ廃棄シ文明日新ノ一学科タラシムル事ヲ勉メザランヤ古典学ヲシテ文明ノ一学科タラシメンニハ国学者ノ陋弊ヲ一掃セズンバ能ハザルナリ」と述べている。とはいふものの、「賀茂真淵・本居宣長」二老ノ時ハ我ト競走スルモノハ、漢学ノミニナリキ、今ハ高尚ナル欧米諸科アリ、コレト進歩ヲ競ハン事、難キガ中ノ難キ也(秋野由之「小言」第一編第四号)というのが現状であった。

小中村義象「第一総集會ニ於テ本會創立ノ意見ヲ述ベ併テ設立以來ノ沿革ニ及ブ」(第一編第六号)は、東洋学会設立の企図は、「講学上」と「護国上」の二点にあったと、言つ。開国以来「百般の事大方は彼に倣ふ事となりたるは、致方なき事にしてあきらむるより外仕方なきなり、何となれば彼は先覚者にして我は後覚者の地位に」あるのであり、西洋にならつて東洋について「字問即道理を研究する」ことが必要である。人々のなかには「彼土の事例のみに依りて、天下の道理を定めんとする者さへ」いるし、東洋研究すら西洋に教えられるのは恥だからである。以上が「講学

上」の理由だが、「護国上」について、小中村はまず、国を「一の有機体」とみなし、「国にも亦全体の風習、感情等」があるとして、「世界各国平和主義」ならざる現状においては「国情（ナショナルリチー）」の養成が必要であると説く。

国情を養成すること既、必要なりとする時は其国古来の歴史を講究するは、必要中の必要にして、急務中の急務と云ふべし、何となれば凡一国の文学言語美術習慣気風感情等は其歴史に顕はるゝものにして、其文学習慣感情等は国情又国の性質を表明するものにして、是を講究すれば、おのづから愛国の情を発するものなればなり、

ここで先に引いた井上哲次郎「日本文学の過去及び将来」の一節を思い起こそう。

国民文学は一切外国思想を拒絶して単に自国に固有なる思想を叙述するに止まるべきものにあらず、若し然くせんか、文学は狭隘褊小にして擬古の地位を脱すること能はず、恰も固陋なる国字者の手に成るが如き性質を成さん、

小中村の「国情」に対して、井上は「国民の精神」といふ言葉を使っている。だがその中身は対照的である。

吾人は吾人に特異なる思想を根拠として各種の思想をして己れに同化せしむべき地位にあるなり、若し各種の思想を如何なる時代よりも取り、如何なる国土よりも集め来たり、自家洪鐘中の物として溶鑄せば、其成果は何づ

れの成分とも同じからざるが故に、是に於てか始めて一種の特質を成すを得、然らば一種の特質とは何ぞや、是れ他にあらず、即ち国民の精神其れ自身を成すものなり、(中略)吾人は我邦に古来国民精神なしと云ふにあらず、否、之れある事を断言するものなり、然れども国民精神も一定不変のものにあらず、又一一定不変なるべきにあらず、

(井上哲次郎「日本文学の過去及び将来」)

繰り返しになるが、『東洋学会雑誌』と『東洋学芸雑誌』はともに東京帝国大学系の雑誌であり、その意味では兄弟雑誌でもあった。ともに加藤弘之の意図の下にあり、先にも述べたように井上哲次郎は『東洋学会雑誌』に「万国東洋学会近況」を報告している。「競争は已に内部と外部にあらずして、内部の分派にあり」という井上哲次郎「新体詩論」の言葉は、意味深長である。「朦朧派」は伝統の継承を志し、「露骨派」は伝統の切断を指向する。その対立の背後には国民国家形成期における、「国情」あるいは「国民精神」をめぐるイデオロギー的な対立があったのである。

注

- 1 以下、新体詩における伝統の切断のことについては、拙稿「維新期の詩歌」(『岩波講座日本文学史 第11巻』一九九六・十)参照。
 - 2 新体詩における改行形式の意義について、揖斐高「改行論 近世長歌と明治新体詩のはざま」(『文学』第3巻第2号、岩波書店)が、すぐれた論を展開している。
 - 3 『万葉集』の「国民歌集」化の問題については、品田悦一『万葉集の発明』(新曜社、二〇〇一・二)に詳細な論がある。
 - 4 落合直文については、拙稿「孝女白菊の歌」解説(『新日本古典文学体系 明治編12』岩波書店、二〇〇一・十)参照。
- (本学教授)